

本学学生におけるネット依存傾向と愛着スタイルとの関連について

藤井 壽夫

The relationship between Net Addiction Tendency and the Attachment Style in Hakodate Junior College Students

Hisao FUJII

概 要

インターネット依存（以下：ネット依存と略す ※論文名等は原文のまま）に関する問題は大学生における学修、学生生活全般に大きな影響を与えている。筆者が一昨年度、本学入学生を対象に、ネット依存に関する質問紙調査を実施した結果、ネット依存得点とエゴグラムにおけるAC因子との関連が示された（藤井 2017a）。また1年後、同一の学生に対して追跡調査を行った結果、深刻なネット依存が懸念される学生数の微増、自己否定的、及び過剰適応的なエゴグラム特性とネット依存傾向との明確な関連が示された（藤井 2017b）。自己否定的傾向、過剰適応的傾向は、幼少期における愛着の形成不全が一因として考えられる。そこで、2018年度、全学生を対象にネット依存傾向、ネット使用時間、及び愛着スタイルを測定する調査を実施した結果、ネット依存傾向、ネット使用時間と愛着スタイルとの間に明確な関連が認められた。愛着スタイルは幼少期における親子関係等の影響が大きく、またその後の安定性（頑健性）が認めれていることから、家庭環境とネット依存の関連が示されたと言える。

問 題

ネット利用に関する弊害は以前から指摘されていた。以前より警察庁は、子ども（※子どもとは18歳未満の青少年をさす）にもたらす弊害として、子どもが携帯電話を通してネットに接続することにより、子どもが違法・有害情報にさらされること、及び子どもが犯罪の加害者、被害者になる危険性を指摘している。また家庭用ゲーム機による害にもふれ、暴力シーン等により子どもの反社会的な行動や人格の形成が助長されること、バーチャル空間にのめり込み、子どもの健全育成に必要な実体験等の機会が損なわれること等を懸念している。さらに子どもが性行為等の対象となることの危険性についても言及していた（警察

庁 2006a, 2006b)。現在、これらはすべて悪化の一途をたどり、青少年の健全育成にとって、緊要な問題となっている。牟田（2004）もネット依存の恐怖について指摘している。とりわけネット（ゲーム）依存に関する問題は世界的に大きな社会問題となっている。このような世界的な流れの中で、2013年、アメリカ精神医学会は、診断マニュアルDSM5の中に、インターネット・ゲーム依存症（Internet Game Addiction）を採用した。また2018年、世界保健機関（WHO）も新たな国際疾病分類（ICD11）にゲーム依存（Gaming Disorder）として加えた。国内においてはすでに魚住（2006）はパソコンや携帯電話を使用しているメールに多くの時間を費やす子どもの依存的で不安定な人間関係を指摘している。現在、スマートフォンの普及により、ネット利用時間の更なる増加により、多くの児童・生徒・学生が、ネット依存傾向を有するまでになっている（総務省情報通信政策研究所 2013）。総務省が実施した日本を含む世界6カ国の調査（総務省 2014）では、韓国を除く五カ国で10代～20代の依存傾向が他の年代より高く、50.0%～69.4%が中程度以上の依存傾向であった（※日本 54.3%）。同年、総務省（2014）が東京都内の高校生 15,191人を対象に実施した「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」では55.8%が依存傾向が疑われる結果となった。大学生においては鄭（2008）は大学生のインターネット依存傾向プロセスとインターネット依存自覚傾向の関連を調べ、依存傾向のある学生ではその自覚にばらつきがあることを示唆している。また友納（鄭）（2013）は大学生におけるインターネット依存傾向を形成する要因として、心理情緒要因、物理的要因、心理ストレス要因、対人関係要因、家族会話機能要因、個人性格要因の6要因について、個人性格、心理ストレス、対人関係、

家族会話機能の要因において「不適切な認知」が生じ、ネット依存傾向形成に影響を及ぼすことを考察している。橋本他(2011)はインターネット利用と依存に関する共同研究を行い、①ネットの長時間利用、②ネット上の種々のサービス・コンテンツ利用、③友人関係の不満足、孤独感、抑うつ傾向が高い、の3要因が影響しており、長時間使用により睡眠時間が短縮され、家族間会話が不足することにより、さらなる孤独感、依存傾向が深まると考察している。八木(2017)は大学生のインターネット依存と性格特性との関連について調査し、ネット依存傾向が高い群は「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」が有意に低いことを認めている。子どもたちのインターネット利用について考える会(2017)も低年齢の子どもとインターネット使用についての多くの弊害、危険性を指摘している。他にも仁尾(2009)は大学生のインターネット依存と友人関係における不安との関係について、土本(2006)は大学生における携帯電話依存傾向と内的対象想起との関連について、伊藤(2009)は大学生のインターネット中毒傾向に関して検討している。本学においては、未発表ながら筆者が2014年、保育学科2年生を対象に「ネット依存等に関する調査」を実施し、生活リズムが乱れ、欠席がちになる学生等、ネット依存傾向と講義への欠席、遅刻との関連が示唆された。筆者(藤井2017a)は28年度入学生を対象にネット依存、及び関連諸要因に関するアンケートを実施し、ネット依存とネット使用時間、ネット被害経験に有意な相関が見られること等を示した。また、同時に実施したエゴグラム等との関連について、ネット依存傾向とAC因子(Adapted Child)との関連が明確に示唆された。また1年後に実施した追跡調査(藤井2017b)では①短期大学生生活1年を経過した後も多くの要因で入学時とほとんど変わっていない、②ネット使用時間が長い学生はネット依存得点が高く、かつ自分にネット依存傾向があることを自覚している、③ネット依存得点の高い学生は、エゴグラムのAC因子が高い、④ネット依存得点の高い学生のエゴグラムはN型Iを示し、他人に気を遣いすぎる傾向がみられる、の4点の結果を得た。特にエゴグラム等から導かれたネット依存を引き起こす心的要因については、幼少期からの愛着スタイル(親子関係を中心とする環境要因により形

成される)が一因として考えられた。愛着については Bowlby(1988)の愛着理論が、幼児期、児童期にとどまらず、生涯にわたる対人関係に影響を及ぼしていることが認められるようになるに従い、大学生においても多くの研究がなされるようになった。鈴木・塚野(2017)は岡田(2011)の愛着スタイル診断テストを用いて、大学生の愛着スタイルが幼少期の親子関係の側面との関連を見いだしている。宮本(2013)は愛着スタイルがインターネット・トラブルに及ぼす影響について検討している。また、宮本(2014)は青年の愛着スタイルが友人関係とインターネット利用に及ぼす影響について大学生と専門学校生を対象に調査し、IT利用が不安型で高く、回避型で低くなる傾向を示唆している。ネット依存と愛着スタイルとの直接的な研究は見られないが、岡田(2011)は愛着障害傾向のある人が趣味、人間関係等において依存しやすいことを指摘している。また、岡田(2014)は発達障害・愛着障害とネット・ゲーム依存が重なるときの重大な問題を危惧している。そこで本調査では、ネット依存傾向、ネット使用時間と愛着スタイルとの関連を探ることとした。

方 法

対象

函館短期大学の学生248人を対象に調査を実施した。内訳は食物栄養学科1年65人(男子12人、女子53人)、保育学科1年50人(男子7人、女子43人)、食物栄養学科2年86人(男子10人、女子76人)、保育学科2年47人(男子3人、女子44人)で、回答に不備のあった2人を除いた、246人を分析の対象とした。

調査時期

2018年3月下旬(※2年生対象)～4月上旬(1年生対象)

調査の方法

食物栄養学科、保育学科ともオリエンテーション時に教師による説明の後、マークシートに回答する形式で調査を行った。なお、個人の生活等に対するアンケートであることから、本学実験等倫理委員会へ審査を依頼し、承認を得た。

調査・研究の内容

ネット依存傾向を測定する尺度としては

Young(1998)が開発し、久里浜医療センターにて訳出した20項目からなる尺度を用い、回答はすべて「全くない」(1点)、「まれにある」(2点)、「ときどきある」(3点)、「よくある」(4点)、「いつもある」(5点)の5件法での回答を求めた。ネットやオンラインゲームの使用時間については、「ネット(ゲーム)使用時間」の設問を設け、「1時間未満」、「1～2時間」、「3～5時間」、「6～7時間」、「8時間以上」の5件法での回答を求めた。愛着スタイルについては、岡田(2013)の3件法による「愛着スタイル診断テスト」を用いた。これらの結果を、平均の比較、相関関係、重回帰分析、 χ^2 検定、依存得点高低による群間比較等によりその関連を探索的に検討し、ネット依存と愛着スタイルとの関連を探っていくこととした。

結果と考察

1 ネット依存得点

Young(1998)による20項目からなる、ネット依存度を測定する5件法スクリーニングテストの合計点(20～100)を個々に算出し、男女別、学年、学科ごとに集計した結果、全体平均は37.92であった(Table 1)。

Table 1 性別×学年・学科別のネット依存得点

ネット依存得点	男子			女子			全体		
	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD	N
食物栄養学科1年	40.50	7.34	12	39.72	13.85	53	39.86	12.86	65
食物栄養学科2年	43.40	16.60	10	38.12	12.30	75	38.74	12.82	85
保育学科1年	35.00	14.49	7	36.84	13.27	43	36.58	13.30	50
保育学科2年	39.67	16.17	3	34.81	10.33	43	35.13	10.61	46
全 体	40.13	12.89	32	37.59	12.56	214	37.92	12.60	246

次に依存得点を従属変数、性別(男子・女子)×学年(1年・2年)・学科(食物栄養学科・保育学科)を要因とする分散分析を行った。その結果、性差($F(1,24) = 1.125$ n.s.)、学年・学科($F(3,242) = 1.59$ n.s.)とも有意な差は認められなかった。従って、この後の処理は性別、学年、学科とも一括して行うこととした。

2 ネット依存度

Young(1998)による、ネット依存測定スケールにおいては、合計点で40点未満を「依存傾向低群(平均的ユーザー)」、40～79点を「依存

傾向中群(中程度に問題あり)」、80点以上を「依存傾向高群(重要な問題あり)」としている。これに従い、各依存傾向における人数、及び各段階ごとの依存得点の平均値を算出した。(Table 2)

Table 2 ネット依存度と平均値

	N	%	(グループ内平均)	SD
依存傾向低群	145	58.9	29.36	5.22
依存傾向中群	97	39.4	48.91	6.81
依存傾向高群	4	1.6	82.00	11.52

過去にYoung(1998)を用いた調査研究が報告されていることから、本学におけるネット依存全体傾向と総務省(2013)が行った「青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査」の大学生691名の結果と比較した結果をFigure 1、及びTable 3に示す。

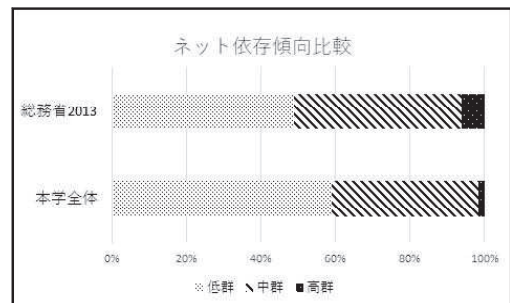


Figure 1 総務省(2013)とのネット依存傾向比較

Table 3 本学学生のネット依存傾向と総務省調査結果（2013）との χ^2 検定結果

ネット依存傾向	低 群	中 群	高 群
本学学生 (N = 246)	145 (2.70) ** 58.9%	97 (-1.51) 39.4%	4 (-2.77) ** 1.6%
総務省調査 (N = 691)	338 (-2.70) ** 48.9%	311 (1.51) 45.0%	42 (2.77) ** 6.1%
合 計 (N = 937)	483 51.5%	408 43.5%	46 4.9%

** p<.01

χ^2 検定の結果、人数の偏りが有意であった ($\chi^2(2)=12.159, p<.01$)。残差分析を行った結果、本学学生は「ネット依存低群」が多く、「ネット依存高群」少ないことが確認された。同様の比較を伊藤（2009）、神戸他（2016）、八木（2017）の結果とも比較したが、いずれも本学の学生の方が、依存度低群の比率が大きかった。Table 4 に各調査の全体平均値を示す。

Table 4 ネット依存得点平均値比較

	ネット依存平均値	N	SD
本 学	37.92	246	12.60
伊藤（2009）	43.48	145	13.54
八木（2017）	46.98	1041	15.07

3 ネット使用時間

ネットやオンラインゲームの使用時間について、「ネット（ゲーム）使用時間」の設問を設け、「1時間未満」、「1～2時間」、「3～5時間」、「6～7時間」、「8時間以上」の5件法で行った。その結果に藤井（2017）の結果を比較のために示す（Table 5、Figure 2、Figure 3）。

Table 5 ネット使用時間

	本調査		2017	
	N	%	N	%
1時間未満	44	17.9	28	19.9
1～2時間	64	26.0	45	31.9
3～5時間	92	37.4	48	34.0
6～7時間	32	13.0	11	7.8
8時間以上	14	5.7	9	6.4
全 体	246		141	

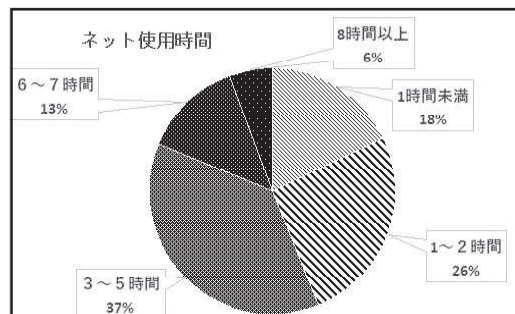


Figure 2 1日のネット（ゲーム）使用時間

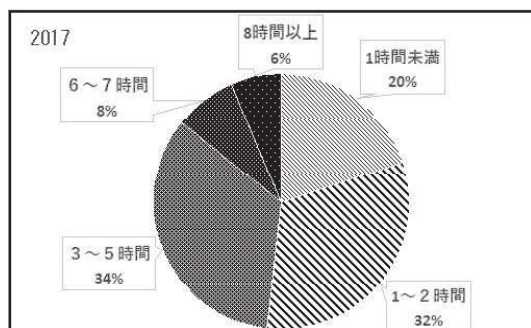


Figure 3 <参考> 藤井 (2017)

人数の分布について昨年度と比較するため χ^2 検定を実施したが有意な差は認められなかった ($\chi^2(4)=3.833, n.s.$)。グラフを比較しても、藤井 (2017) より「1～2時間」で少なく、「3～5時間」で増加しているが、全体では同様の分布を示した。半数強の学生が毎日3時間以上ネットを使用しており、2.5時間以上を長時間使用と考えるとやはり看過できない状況であると言える。

次にネット使用時間とネット依存傾向の関連を探るため Spearman の相関係数を両変数間で求めたところ中程度の正の相関が認められた ($509 P<.0001$)。藤井 (2017) と同様の結果と言える (2017 .433 $p<.0001$)。

4 愛着スタイル

次に岡田 (2013) に従い、9つの愛着スタイル分類したところ Table 6 の結果となった。

<参考>愛着スタイルの分類方法について

岡田 (2013) の愛着スタイル診断テストは45項目からなり、各設問「はい」「いいえ」「どちらでもない」(※異なる回答様式も数問含まれる。)で回答し、「安定型スコア0～20点」、「不安定型スコア0～20点」、「回避型スコア0～20点」、「未解決型愛着スコア0～7点」の4項目に集計される。最も高かったスコア型を基準とする。

Table 6 本学学生の愛着スタイル結果

愛着スタイル	安定型	安定-不安型	安定-回避型	不安型	不安-不安定型	回避型	回避-不安定型	恐れ・回避型	未解決型
	75	63	12	17	35	3	15	21	5
(N = 246)	30.5%	25.6%	4.9%	6.9%	14.2%	1.2%	6.1%	8.5%	2.0%

15点以上の場合には非常に強く、10点以上の場合には強いと判断される。また、2番目のスコアが5点以上の場合にはその傾向も無視しがたい要素となる。この基準に従い9つの愛着スタイルに分類される (Table 7)。

Table 7 各愛着スタイルの判定基準

愛着スタイル	判定基準
安定型	安定型スコア \gg 不安型、回避型スコア
安定-不安型	安定型スコア $>$ 不安型スコア ≥ 5
安定-回避型	安定型スコア $>$ 回避型スコア ≥ 5
不安型	不安型スコア \gg 安定型、回避型スコア
不安-不安定型	不安型スコア $>$ 安定型スコア ≥ 5
回避型	回避型スコア \gg 安定型、不安型スコア
回避-不安定型	回避型スコア $>$ 安定型スコア ≥ 5
恐れ・回避型	不安型・回避型スコア \gg 安定型スコア
未解決型	未解決型スコア ≥ 5

ところで鈴木・塚野 (2017) は調査対象者の「安定型スコア」、「不安定型スコア」、「回避型スコア」の合計点の一番得点の高かった愛着スコアをもって、愛着タイプとする簡便法で検討している。筆者も全く同じ方法で分類し、その割合を比較した結果を Table 8 に示す。

χ^2 検定の結果、人数の偏りが有意であった ($\chi^2(2)=6.115, p<.01$)。残差分析を行った結果、本学学生は「安定型スタイル」の学生が少なく、「不安定型スタイル」の学生が多いことが確認された。他研究においても3分の2ほどが安定型スタイルを示す (岡田 2011) ことが知られており、本学学生の全体的愛着スタイル傾向の表れと捉えられる。ただ、安定型に分類される半数以上が不安型スコア得点が無視できないスタイルであること等を考慮し、本研究では、9つの分類そのままでの後の検討を行うこととした。また、4つ愛着スタイルのうち、未解決スコアを除く3つについて、得点合計高低群に分割しての群間比較も行った。

Table 8 本学学生の「愛着スタイル」他研究結果との χ^2 検定結果

愛着スタイル	安定型	不安型	回避型
本学学生 (N = 246)	150 (-2.64) ** 61.0%	73 (2.99) ** 29.7%	23 (-0.14) 9.3%
鈴木・塚野 (N = 143)	106 (2.64) ** 74.1%	23 (-2.99) ** 16.1%	14 (0.14) 9.8%
合計 (N = 389)	256 65.8%	96 24.7%	37 9.5%

** p<.01

5 ネット依存傾向と愛着スタイルとの関連

ネット依存傾向と愛着スタイルとの関連を探るために、愛着スタイル×ネット依存得点の分散分析を行った結果、有意であった (F(8,²³⁷)=2.21 p<.05)。LSD 法を用いた多重比較の結果、安定型と安定-不安型、安定型と不安型、安定-不安型と回避安定型、不安型と回避-安定型、不安-安定型と回避-安定型、回避-安定型と恐れ・回避型に有意差があった (MSe=153.14,5%水準) (Table 9、Table 10)。

この結果を詳細に検討すると、安定型 (35.49) に対して、安定-不安型 (40.08)、不安型 (42.53) となっており、「安定型」のネット依存得点平均値が「ネット依存傾向低群」にあるのに対し、「安

Table 9 各愛着スタイルにおけるネット依存得点平均

愛着スタイル	ネット依存得点平均	N	SD
安定型	35.49	75	10.80
安定-不安型	40.08	63	12.76
安定-回避型	36.33	12	16.16
不安型	42.53	17	19.24
不安-安定型	40.03	35	10.84
回避型	31.33	3	6.11
回避-安定型	29.80	15	8.20
恐れ・回避型	40.81	21	10.35
未解決型	36.80	5	20.17

定-不安型」、「不安型」は「ネット依存傾向中群」に入っている。有意差は検出されなかったものの、不安-安定型 (40.03)、恐れ・回避型 (40.81) とも「ネット依存傾向中群」に入っている。この

Table 10 LSD 法による多重比較の結果

愛着スタイル	安定型	安定-不安型	安定-回避型	不安型	不安-安定型	回避型	回避-安定型	恐れ・回避型	未解決型
安定型	—	<		<					
安定-不安型		—					<		
安定-回避型			—						
不安型				—			<		
不安-安定型					—		<		
回避型						—			
回避-安定型							—	<	
恐れ・回避型								—	
未解決型									—

不等号 p<.05

ことは「不安型スコア高群」がネット依存になりやすいことを明確に示している。次に安定－回避型 (36.33)、回避型 (31.33)、回避－安定型 (29.80) が示すように「回避型スコア高群」では、ネット依存得点はその全てで低い傾向が認められた。この結果は宮本 (2013、2014) が指摘している、関係不安型愛着スタイルにいじめ被害、ネット依存、対人トラブル、IT 利用率が高く、関係回避型では逆となっている結果と一致する。

愛着スタイルとネット依存傾向の関連をさらに明確にするために、ネット依存度別の愛着スタイル得点の平均値比較を行ったところ、安定型得点で有意な結果となった ($F(2,243) = 4.27$ $p < .05$)。LSD 法による多重比較の結果「ネット依存傾向低群」と「ネット依存傾向中群」で有意であった ($MSe = 13.42$ 5% 水準)。また不安定型得点で有意な結果となった ($F(2,243) = 3.26$ $p < .05$)。LSD

法による多重比較の結果「ネット依存傾向低群」と「ネット依存傾向中群」で有意傾向であった ($MSe = 10.22$ 5% 水準) (Table 11)。

各愛着得点は 10 点以上がその傾向が強いとされていることから、安定型スコア、不安型スコア、回避型スコアについて、10 点を分割点として、2 群に分割し、それぞれの群のネット依存得点平均値の群間比較を行った (Table 12)。

T 検定の結果、3 つのスコアとも平均の差は有意であった (安定型スコア $T(244) = -1.98$ $p < .05$ 、不安型スコア $T(244) = 2.12$ $p < .05$ 、回避型スコア $T(244) = -2.15$ $p < .05$)。

これらの結果により、安定型スコア高群、不安定型スコア低群、回避型スコア高群ではネット依存得点が低く、ネット依存になりにくいことがすべての結果から明確に確認された。

Table 11 本学学生のネット依存傾向と愛着タイプ得点

	安定型得点 依存得点平均 (SD)	不安型得点 依存得点平均 (SD)	回避型得点 依存得点平均 (SD)
ネット依存傾向低群 (N=145)	11.67 (3.44) *	8.21 (3.29) †	6.17 (3.54)
ネット依存傾向中群 (N=97)	10.33 (3.94) *	9.12 (3.07) †	5.71 (3.23)
ネット依存傾向高群 (N=4)	9.50 (4.66)	10.75 (2.36)	7.25 (1.70)

* $p < .05$ † $p < .10$

Table 12 本学学生の各愛着得点高低群におけるネット依存得点比較

愛着タイプ得点	安定型スコア 依存得点平均 (SD)	不安型スコア 依存得点平均 (SD)	回避型スコア 依存得点平均 (SD)
低 群	40.31 (13.21) * (N=171)	36.59 (11.83) * (N=152)	38.68 (12.87) * (N=206)
高 群	36.88 (12.21) * (N=75)	40.07 (13.54) * (N=94)	34.03 (10.35) * (N=40)

* $p < .05$

6 ネット使用時間と愛着スタイルとの関連

ネット依存傾向とネット使用時間には、中程度の正の相関が認められる(509 P<.0001)ことから安定型愛着スタイルでは使用時間が少なく、不安型愛着スタイルでは使用時間が長くなると予想される。そこで度数が低すぎるが、ネット使用時間と愛着スタイルとの傾向を探るために、ネット使用時間と愛着スタイルとの χ^2 検定を実施したところ人数の偏りが有意であった($\chi^2(32)=47.28, p<.05$)。その結果をTable 13に示す。残差分析を行った結果、「6～7時間」の長時間使用が安定型では少なく、安定-不安型で多いこと、「1～2時間」の平均的使用時間で不安-安定型が少ないことの3点が認められたが、いずれも度数が低く、安定型で使用時間が少なく、

不安型で使用時間が長くなるという予測を確認するには至らなかった。

ただ、確かに不安型愛着スタイルでは、使用時間が長い傾向が窺えたことから、探索的にネット使用時間と不安型愛着得点高低群による群間比較を行った。 χ^2 検定を実施したところ人数の偏りが有意であった($\chi^2(4)=10.32, p<.01$)。その結果をTable 14に示す。残差分析を行った結果、「6～7時間」において不安型得点高群は不安型得点低群より有意に人数が多かった。このことから不安型愛着スタイル傾向のある人は、ネットを長時間使用していることが示唆された。

Table 13 ネット使用時間と愛着スタイルとの χ^2 検定結果

愛着スタイル	安定型	安定-不安型	安定-回避型	不安型	不安-安定型	回避型	回避-安定型	恐れ・回避型	未解決型
1時間未満	13(-.1) 17.3%	7(-1.6) 11.1%	3(.7) 25.0%	4(.6) 23.5%	8(.8) 22.9%	1(.7) 33.3%	5(1.6) 33.3%	1(1.6) 4.8%	2(1.3) 40.0%
1～2時間	24(1.4) 32.0%	13(-1.1) 20.6%	4(.6) 33.3%	4(-.2) 23.5%	3(-2.5)*0(-1.0) 8.6%	6(1.3) 0.0%	7(.8) 40.0%	3(1.7) 33.3%	3(1.7) 60.0%
3～5時間	30(.6) 17.3%	24(.1) 11.1%	3(-.9) 25.0%	3(-1.7) 23.5%	18(1.9) 22.9%	2(1.1) 33.3%	3(-1.4) 33.3%	9(.5) 4.8%	0(-1.7) 40.0%
6～7時間	4(-2.4)*14(2.5)* 5.3%	0(-1.4) 0.0%	4(1.3) 23.5%	5(.2) 14.3%	0(-.7) 0.0%	1(-.8) 6.7%	4(.9) 19.0%	0(-.9) 0.0%	0(-.9) 0.0%
8時間以上	4(-.2) 5.3%	5(.9) 7.9%	2(1.7) 16.7%	2(1.1) 11.8%	1(-.8) 2.9%	0(-.4) 0.0%	0(-1.0) 0.0%	0(-1.2) 0.0%	0(-.6) 0.0%
合計	75	63	12	17	35	3	15	21	5

* p<.05

Table 14 ネット使用時間と不安型愛着得点高低群との群間比較

ネット使用時間	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～7時間	8時間以上
不安型得点高群 (N=94)	15(-.6) 16.0%	198-1.6) 20.2%	35(.0) 37.2%	20(3.0)** 21.3%	5(-.2) 5.3%
不安型得点低群 (N=152)	29(.6) 19.1%	45(1.6) 29.6%	57(.0) 37.5%	12(-3.0)** 7.9%	9(.2) 5.9%
合計 (N=246)	44 17.9%	64 26.0%	92 37.4%	32 13.0%	14 5.7%

** p<.01

総合的考察

本学学生 246 名に対する調査結果から、ネット依存傾向と一人一人のもつ愛着スタイルとの関連性が明確に示された。安定型愛着スタイルの人はネット依存傾向が低く、ネット使用時間も平均的使用に留まっていた。一方、不安型愛着スタイルの人はネット依存傾向が中程度以上に高く、概してネット使用時間も長時間となっていた。実際には、きわめて複雑で多くの要因が関係しているが、端的にまとめると、安定型愛着スタイルの人は、乳幼児期、安定した養育者との親密な関係の中から、他者への信頼、世界への好奇心、自己達成感等を、養育者を安全基地として成長していった結果のスタイルと考えられている。他方不安型愛着スタイルの人は、不安定で一貫性のない養育者、過保護、過干渉、支配的養育者等との関係において、十分な安全基地を確保できないで育った結果と捉えられる。ネット文化が急速に浸透してきた現在、安定型愛着スタイルの人が、適切な距離を取れるのに対し、不安型愛着スタイルの人が、他者に過度に気を遣い、SNS等に多くの時間を費やした結果、ネット依存傾向を有していくことは想像に難くない。一方、回避型愛着スタイルの人は、安定型よりもネット依存傾向が低い結果となった。回避型愛着スタイルの人は、養育者の拒否的な態度により、愛情を受けることに諦められてしまい、何事にも回避的に行動する特性を身につけてしまっており、SNS等の人間関係に対しても回避的傾向の結果と思われる。ネット依存に対する危機が、乳幼児期から既に始まっていると言うことは、ネット依存防止教育の難しさを表している。子どもたちのインターネット利用について考える研究会の活動を見ると、養育者への啓発活動が多く見られるが、十分に頷ける。

本学においては、安定型愛着スタイルの人数が他研究結果と比較して、有意に少なかった。また、安定型愛着スタイルに分類されても、相当数が不安型得点も高い様子を示した。このことは、学生指導等において十分に配慮していかなければならない点であると思われる。今後、中学生、高校生、他大学生における調査を実施し、ネット依存傾向と愛着スタイルの関連を詳細に検討していきたい。

まとめ

- 本研究においては、以下の点が明らかになった。
- ①安定型愛着スタイルの人はネット依存傾向が低く、ネット使用時間も平均的使用に守られていた。
 - ②不安型愛着スタイルの人はネット依存傾向が中程度以上に高く、概してネット使用時間も長時間となっていた。
 - ③回避型愛着スタイルの人は、安定型よりもネット依存傾向が低い結果となった。回避型愛着スタイルの人は、SNS等の人間関係に対しても回避的傾向の結果と思われる。
 - ④愛着スタイルの原型が乳幼児期に遡るとすれば、ネット依存防止教育は早期に家庭からスタートしなければならない。

本問題は今後も継続して、検討していかなければならない課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、両学科のご協力により、オリエンテーション時に調査をさせていただくことができました。両学科の先生方、事務局担当の方々、学生に対しまして厚く感謝申し上げます。

引用文献

- Bowlby, J (1988) A Secure Base: Clinical Application of Attachment Theory (仁木武監訳 1993『ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地』医歯薬出版)
- 藤井壽夫 (2017a) 本学新入生におけるネット依存傾向と関連諸要素に関する心理学的研究. 函館短期大学紀要, 43;47-56
- 藤井壽夫 (2017b) 本学学生のネット依存傾向と関連諸要素及びエゴグラムに関する追跡研究. 函館短期大学紀要, 44;37-49
- 橋元良明他 (2011) インターネット利用と依存に関する研究報告. 総務省情報通信政策研究所
- 伊藤将晃 (2009) 大学生のインターネット中毒傾向に関する研究. 臨床教育心理学研究, 3, 1-6
- 警察庁 (2006a) 携帯電話がもたらす弊害から子どもを守るために. バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会
- 警察庁 (2006b) バーチャル社会のもたらす弊害

- から子どもを守るために、バーチャル社会の
もたらす弊害から子どもを守る研究会
警察庁(2017)平成28年度コミュニティサイ
ト等に起因する事犯の現状と対策について
子どもたちのインターネット利用について考える
会(2017)子どもたちのインターネット利
用について考える会第八期報告書、子どもた
ちのインターネット利用について考える会
牟田武生(2004)『ネット依存の恐怖』教育出版
内閣府(2013)平成24年度青少年のインターネッ
ト利用環境実態調査調査結果(速報)
仁尾友紀他(2009)大学生の携帯メール依存に
ついて—友人関係における不安との関係、徳
島大学総合科学部人間科学研究,17,73- 90
岡田尊司(2011)『愛着障害 子ども時代を引き
ずる人々』光文社
岡田尊司(2013)『回避性愛着障害 絆が希薄な
人たち』光文社
岡田尊司(2014)『インターネット・ゲーム依存
症 ネットゲからスマホまで』文春新書
総務省(2014)平成26年度情報通信白書、総務
省
総務省情報通信政策研究所(2013)青少年の
インターネット利用と依存傾向に関する調
査、総務省情報通信研究所
総務省情報通信政策研究所(2014)高校生のス
マートフォン・アプリ利用とネット依存傾向
に関する調査報告書
鈴木昌喜、塚野弘明(2017)大学生の愛着スタ
イルと幼少期の親子関係に関する研究、岩手
大学教育学部附属教育実践センター研究紀
要,16,71-81
鄭艶花(2008)大学生の<インターネット依
存傾向プロセス>と<インターネット依存傾
向自覚>に関する実証的研究、九州大学心理
学研究,9:111-117
友納(鄭)艶花(2013)若者のインターネット
依存傾向形成要因と特徴に関する心理学的研
究、九州共立大学総合研究所紀要,6:19-26
土本亜矢子・緒賀郷志(2006)大学生におけ
る携帯電話依存傾向と内的対象想起との
関連、岐阜大学教育学部研究報告(人文科
学),55,217-225
魚住絹代(2006)『メール利用と子どもたちの現
状』文部科学省審議会情報提供資料
八木成和(201)大学生のインターネット依存と
性格特性との関連について、四天王寺大学紀
要,64,73-82
Young,K.S.(1998) Caught in the net:How to
recognize the signs of internet addiction and
awining strategy for recovery. New York:Jhon
Wiley &Sons,Inc.